

『訓蒙図彙』寛文版本の「属対」

楊 世瑾

The Correspondences of the Kanbun Version of *Kinmozui*

YANG Shijin

摘要 《訓蒙図彙》是日本第一部图解百科事典。其凡例中明确提到重视项目名的“属対”。本论文旨在阐明寛文版本中项目名、本文、图像各自对应，三位一体，这正是《訓蒙図彙》的属対的内核。

キーワード：訓蒙図彙 属対 対語 図像 版面

はじめに

寛文六年（1666）刊、中村惕斎撰『訓蒙図彙』二〇巻は、日本最初の絵入り百科事典である¹⁾。全二〇巻は「天文」以下、17部1484項目から成り、一項目に一図を配し、和名・異名と簡潔な注解を付すが、ままた、解説を付さない場合もある。初版（以下、寛文版本と略称す）刊行後、『訓蒙図彙』には大きな増補改訂が施され、元禄八年（1695）撰者未詳『頭書増補訓蒙図彙』二一卷、寛政元年（1789）撰者未詳、下河辺拾水画図『頭書増補訓蒙図彙大成』二一卷が刊行された。

杉本つとむ氏は、寛文版本の項目の表示形式として、掲出語・和名・注解の表示の類型を分類して示された²⁾。ただし、掲出語間の対応関係については、あまり言及されていない。

本稿は、寛文版本の掲出語が対語として対応しており、掲出語だけではなく、本文の構成・版面の図像もまた、対の形式として番えられていることを明らかにすることを目的とする。

一、『訓蒙図彙』寛文版本の掲出語にみられる「属対」

『訓蒙図彙』の三種の版本は、共通して中村惕斎の「凡例」を掲載する。その「凡例」

において、中村惕斎は掲出語について次のように述べている。

凡一―事^{ニシテ}而数^{ナル}者^ハ、以^テ正^ノ名^ヲ為^ス標^ト、而注^ス異^ノ名^ヲ于其^ノ下^ニ。或^ハ為^シ拘^ルカ^ニ于属^ノ対^ニ、或^ハ為^シ避^{カル}カ^ニ于重^ノ字^ニ、題^{スル}ニ以^テス^ルトキハ^ニ異^ノ名^ヲ、則注^{スル}ニ以^テシテ^テ正^ノ名^ヲ曰^ク某^レ也、曰^ク某^カ之^ノ一^ノ名曰^ク某^レ、謂^ト之^ヲ某^{レト} 3)。

(凡そ一事にして数名なる者は、「正名」を以て標と為して、「異名」を其の下に注す。或いは「属対」に拘るが為、或いは「重字」に避がるが為に、題するに「異名」を以てするとき、則ち注するに「正名」を以てして曰く「某れ也」、曰く「某が一名は曰く、某れ」、「之を某れと謂ふ」と。)

これによれば、『訓蒙図彙』は、名前が複数あるものは、基本的には正式な名前「正名」を掲出語としてあげ、その下に「異名」を注記する。しかし、「属対」に拘っていたり、「重字」を避けるために、「異名」を掲出語とるときは、「正名」を「某である」、「某の一名は某という」、「これを某という」等と注記する。

中村惕斎のいう「属対」とは何であろうか。そして、『訓蒙図彙』全体の構成において、「属対」はどのように扱われているのか。

「属対」の「属」は、「つらねる」「作る」ことをいい、文章を作る意味の「属文」等の用例がある。「属対」は、詩文述作の際に、語や句を連ねて対語や対句を作ることという。

絵入り百科事典である『訓蒙図彙』の版面には、大きな図像を掲げる。三種の版本のうち、初版の寛文版本の版面(図A)には、半丁に二つの項目が上下に配される。この形式を、仮に私に「上下一対」と称することとする⁴⁾。この版面全体には、掲出語・本文・図像が掲げられている。

この版面に、「属対」はどのように配されるのであろうか。

まず、掲出語の文字数に注目したい。寛文版本の掲出語は、文字数が一字、あるいは二字であり、三字以上の掲出語は存在しない。これを次のように称することとする。

漢字一字の掲出語：一字掲出語

漢字二字の掲出語：二字掲出語

上下一対の掲出語は、文字数がすべて一致し、対応している。例えば、上下一対の一字掲



図A・①「日」「月」
『訓蒙図彙』巻一 9才

出語には、卷一「日・月」がある（図A）。上下一対の二字掲出語には、卷一「日蝕・月蝕」がある（図B）。つまり、寛文版本の版面には、一字掲出語が二語一対、あるいは二字掲出語が二語一対のように番えられて、版面半丁の上下に配されているのである。

寛文版本 1484 項目をすべて調査したところ、一字掲出語、二字掲出語それぞれが対になって番えられている例は次のように確認された。

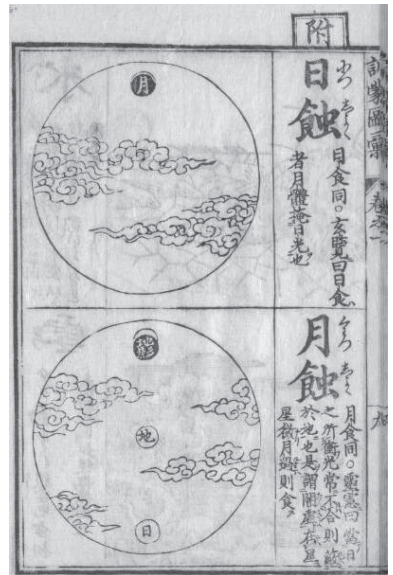
一字掲出語 二語一対：856 項目（428 対）

二字掲出語 二語一対：628 項目（314 対）

本稿では、このうち、二字掲出語の二語一対の形式 314 対を対象として考察を進める。

二字掲出語の二語一対には、次のような対応の形式が見られる。

- (一) 一字一致
- (二) 部首一致



図B・「日蝕」「月蝕」
『訓蒙図彙』卷一 9ウ

(一) 一字一致

二字掲出語 314 対のうち、66 対の掲出語には共通する文字が用いられている。例えば、卷一「日蝕・月蝕」は二字掲出語であり、そのうちの一字「蝕」字が共通する（図B）。これを「一字一致」と称することとする。「一字一致」は、必然的に対語を生むことに留意しておきたい。

寛文版本にはこうした一字一致が 66 対確認される。これを一覧すると、表1のようになる。

表1 『訓蒙図彙』寛文版本「一字一対」の66対

卷一天文：「日蝕・月蝕」（9ウ）

卷四人物：「弓人・矢人」（11オ）・「筆工・硯工」（13ウ）・「銀匠・漆匠」（14オ）・「長臂・長脚」（20ウ）・「小人・長人」（21オ）

卷六衣服：「夾衣・浴衣」（12ウ）・「雨衣・涎衣」（13ウ）

卷七宝貨：「水精・火精」（12ウ）・「石灰・石膽」（13ウ）

卷八器用一：「燭臺・燭奴」（17オ）・「燈籠・燈擎」（18オ）・「方燈・提燈」（18ウ）・「香爐・香案」（19ウ）・「佩香・線香」（21オ）・「銅鑼・銅鉢」（21ウ）・「羯鼓・腰鼓」（22オ）

卷九器用二：「鐵杷・鐵鞭」(19 ウ)

卷十器用三：「蠶連・蠶簿」(22 オ)・「繰車・繅車」(22 ウ)・「攪車・紡車」(23 ウ)・「塘網・撒網」(25 オ)・「趕網・攬網」(25 ウ)・「魚梁・魚簷」(26 オ)・「絞車・繩車」(28 オ)・「削刀・裁刀」(29 ウ)

卷十一器用四：「温壺・耳壺」(24 ウ)・「湯鐘・水罐」(28 オ)・「銅鈔・銅提」(29 オ)・「提爐・提盒」(29 ウ)・「炬火・燎火」(30 オ)・「吹筒・唧筒」(30 ウ)・「石燈・石碑」(34 オ)・「佛龕・佛座」(34 ウ)

卷十二畜獸：「獾犬・獒犬」(14 ウ)・「野豬・山豬」(15 オ)・「海狗・海獺」(16 ウ)

卷十三禽鳥：「鴨雞・矮雞」(14 ウ)・「錦雞・綬雞」(15 オ)・「山雞・火雞」(15 ウ)・「竹雞・秧雞」(16 オ)・「青鳩・鳴鳩」(16 ウ)・「角鴟・怪鴟」(17 オ)・「雲雀・翠雀」(18 ウ)・「山鵲・練鵲」(19 ウ)

卷十四龍魚：「鮪魚・鱗魚」(14 オ)・「金魚・梭魚」(15 ウ)・「海牛・海馬」(16 ウ)

卷十五虫介：「海燕・海膽」(21 ウ)・「烏蛇・銀蛇」(23 オ)

卷十六米穀：「刀豆・黎豆」(8 ウ)

卷十七菜蔬：「冬瓜・醬瓜」(12 ウ)・「胡瓜・絲瓜」(13 オ)・「木耳・石耳」(15 オ)

卷十八果蓏：「胡桃・胡椒」(13 オ)・「甜瓜・苦瓜」(13 ウ)・「白柿・烏柿」(14 オ)

卷十九樹竹：「紫薇・紫荊」(15 オ)・「木蘭・木櫨」(17 ウ)・「櫛木・榆木」(19 オ)・「蘆竹・櫻竹」(21 ウ)・「扶竹・紫竹」(22 オ)

卷二〇花草：「山丹・卷丹」(17 ウ)・「鳳仙・水仙」(18 ウ)・「金錢・金盞」(19 ウ)・「石帆・石斛」(22 ウ)

このように、寛文版本の配列には、一字一致の対語が意識的に用いられている。

しかも、この 66 対の一字一致の掲出語(項目)は、すべて「附」項目である。

別稿に論じたように、寛文版本の項目はすべて 1484 項目あるが、本文としてあげられる掲出語は 1000 項目である。これを、仮に本文項目と称しておく。その後、各巻末に「附」字を付した項目が 484 項目付されている。これを「附」項目と称することとする⁵⁾。

1000 の本文項目の掲出語には、重複する文字はまったく用いられていない。

一方、「附」を付す各巻末の「附」項目 484 項目には、本文項目と重複する文字が用いられている⁶⁾。

本文項目の掲出語は、重複文字を含まないので、一字一致の掲出語が、すべて「附」項目に存在するのは、当然といえよう。「附」項目の掲出語には、本文項目の掲出語

と一字一致する文字がある。しかも、「附」項目同士にも重複する文字が多数見られることに注目したい。このように、寛文版本は各巻末の「附」項目において、文字を重複して活用することによって、「属対」を構成しているのである。

（二）部首一致

『訓蒙図彙』の掲出語にみられる部首の一致について、別稿では、寛文版本は、漢字の部首が共通する文字を集めて四字句群を構成する例が複数確認されることを指摘した⁷⁾。同様に、部首が一致する掲出語を集めて、「属対」を作る例もまた、複数存在する。

表2は寛文版本の二字掲出語のうち、部首が対応する二語一対31対を一覧したものである。

表2 『訓蒙図彙』寛文版本「部首一致」の31対

人偏：俳優 - 侏儒（卷四人物）
月偏：臟腑 - 胞胎（卷五身体）
王偏：玻瓈 - 瑪瑙 珊瑚 - 琥珀 琅玕 - 玳瑁（卷七宝貨）
金偏：銅鑼 - 銅鉢（卷八器用一）
口偏：噴吶 - 喇叭（卷八器用一）
彡偏：猩猩 - 狒狒（卷十二畜獸）
鳥偏：鷓鴣 - 鶻鵒 鷓鴣 - 鸚鵡（卷十三禽鳥）
虫偏：蟾蜍 - 蝦蟆 蝌蚪 - 蚯蚓 蝶蝨 - 蜥蜴 蝮蛇 - 蝮蟪 蠅蝮 - 蝮蛇 蠟蟪 - 蜻蛉 蜘蛛 - 螻蛄 螻蛄 - 蛄蛻 蛄蛻 - 蛄蛻 蛄蛻 - 蛄蛻 蛄蛻 - 蛄蛻 （卷十五虫介）
草冠：蕪菁 - 萊菔 菠薐 - 蒼蓬 藜藿 - 薯蕷 商陸 - 蒟蒻（卷十七菜蔬）
芭蕉 - 薏苡 芡蔚 - 蒿蓍 萍蓬 - 茵陳（卷二〇花草）
木偏：枇杷 - 枳椇 楊梅 - 檮棗 梅檀 - 櫻櫚 梧桐 - 楊櫚（卷十九樹竹）

『訓蒙図彙』「凡例」で中村惕斎が述べる「属対」の基本構造とは、これら上下一対・一字一致、上下一対・部首一致をさすのであろう。

二、『訓蒙図彙』寛文版本の「属対」の意義

そもそも、対語・対句を重んじる伝統は、古く六朝の啓蒙書・手習い書、梁・周興嗣撰『千字文』一卷に始まる。『千字文』は、四言韻文250句からなり、対語と対句を多数用いている。さらに、唐・天宝五年（746）頃の李瀚撰『蒙求』三巻は、四言韻文の「標題」に注をつけた幼学書である。その「標題」は、著名な人物名二字とその事跡二字で四言一句を作り、事柄の類似なる二句を一対とし、八句換韻にしてい

る⁸⁾。これも対句を用いる。標題を文芸的現象と捉える視点は、夙に相田満氏により提示されている⁹⁾。

また、韓艶玲氏は、唐・開元十六年(728)に成立した、徐堅等撰『初学記』三〇巻における「事対」に着目し、対をなす掲出語を二つ挙げ、出典をそれぞれ割り注の形で提示することを指摘された¹⁰⁾。

つまり、『千字文』『蒙求』『初学記』をはじめとする幼学書・類書は、覚えやすいように対句や対語を用い、固定した字数を有する四字句や二字漢語を掲出語とする特徴を有しているのである。

『訓蒙図彙』寛文版本の掲出語が対語の形式で構成されるのは、こうした幼学書の伝統を踏襲したものと考えられる。

三、『訓蒙図彙』寛文版本の本文・図像にみられる「属対」

『訓蒙図彙』寛文版本の版面は図像と本文を枠で区切り、四分の三は図像が占め、掲出語・本文は四分の一に収められている。『訓蒙図彙』が図像を重視していることが、この版面の配分からも知られる。

『訓蒙図彙』の版面を構成するのは、掲出語・本文・図像である。掲出語のみならず、これら三者は、対の形式で構成されていることが推測される。そこで、版面を構成する図像自体が対の形式で番えられていること、その本文が上下で対を成していることを確認してゆきたい。

(一) 一字一致

『訓蒙図彙』において、上下一対の二字掲出語のうち、最も目に付くのは、「日蝕・月蝕」「野猪・山猪」「海狗・海獺」であろう。これらは、半丁の上下に二項目が配されている。

① 「日蝕」「月蝕」(前掲図B)

まず、『訓蒙図彙』巻一の「附」項目には、「日蝕・月蝕」が配されている(図B)。

第一に、「日蝕」本文には、『玄覽』を引いて、「日蝕(食)」とは月が日光を覆うことと注される。

日-食同。○玄-覽^ニ曰、日-食^ハ者、月-体掩^ニ日-光^ヲ也。

(日食に同じ。○『玄覽』に曰く、「日食は、月体、日光を掩ふなり」と。)

第二に、「月蝕」本文には、後漢の天文書、張衡撰『靈憲』を引いて、次のように記す。

月-食同。○靈-憲^ニ曰、当^テ日之所^ニ衝^フ、光常^ニ不^ル合、即蔽^ル於^レ地^ニ也。
是^ヲ謂^フ闕-虚^ト。在^ニ星^ニ星微^{ナリ}、月過^{ルトキハ}即食^ス。

（月食に同じ。『靈憲』に曰く、日の衝ふ所（に）当りて、光、常に合はざるは、即ち地に蔽るればなり。是れを「闇虚」と謂ふ。星に在るには、星微かなり。月過るときは、即ち食す。）

『靈憲』によれば、「月蝕（食）」とは、月が日の向かう所に当たって、光が常に合わないことをいう。それは地に覆われたからであり、これを「闇虚」という。闇虚が星にある時には星の光は微かになり、月を通る時には月蝕が生じる。

「日蝕・月蝕」の本文は、いずれも『訓蒙図彙』には珍しく漢籍を引用して、古代中国の概念でこの天体現象を説明する。一方、両者の図像はともに、大きな円の中に雲形を配し、「日蝕」は上部「月」を描き、「月」が「日」の光を蔽うことを示す。「月蝕」は上から「地影」「地」「日」を描いて、「日」の光が「地（球）」を照らして「地影」が生じ、この影が月を覆うことを示して、いずれも本文の説明の役割を果たしている。

以上のことから、「日蝕」「月蝕」は、上下一対として、掲出語が対語になっている。また、本文、図像も対の形式としてそれぞれ対応している。『訓蒙図彙』は、対語形式をとって上下一対の版面を構成しているのである。

②「野猪」「山猪」（図C）

同様に、「猪」字の一字が一致する「野猪・山猪」の二項目から成る版面（図C）を検討しておきたい。

第一に、「野猪」の本文には、和名「くさみなき」、俗称「ゐのしし」をあげ、「野猪」と同じと注する。

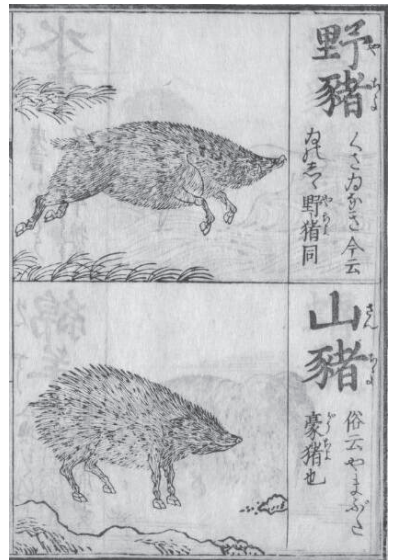
くさみなき。今云、ゐのしし、野猪同。^{やちよ}

第二に、「山猪」の本文は俗称「やまぶた」、別名「豪猪」をあげる。

俗云、やまぶた。^{がうちよ}豪猪也。

両者の本文の内容はほぼ対応しており、図像も、「野猪」が走る姿、「山猪」が立ち姿であるが、どちらも同種の獣である（図C）。

以上のことから、「野猪」「山猪」も、掲出語が対語になっているだけでなく、本文・図像も対の形式として、それぞれが対応していることが確認されよう。また、「野猪」「山猪」は、上下一対の獣として、身体全体が同じ向きに描かれている。



図C・②「野猪」「山猪」
『訓蒙図彙』卷十二 15才

③ 「海狗」「海獺」(図D)

上下一対の二字掲出語「海狗」「海獺」は、「海」字が一字一致する(図D)。

「海狗」はオットセイ、『日本国語大辞典』「膾膾膾」の「語誌」には次のように記す。

(1) アイヌ語の onnep を中国で膾膾と音訳し、その膾(ほぞ)が薬用にされ、本草家に「海狗腎(かいくじん)」または「膾膾膾」と呼ばれた。それが中国の本草書から日本へはいつてきたものである。

(2) 「文明本節用集」に「膾膾膾 ヲットセイ」とあり、「伊京集」には、「膾膾膾 ヲットサイ」とある。

第一に、『訓蒙図彙』「海狗」本文には、和名「うにう」、漢名「膾膾獸」、別名「骨膾」をあげ、その腎臓を「膾膾膾」と注する。

うにう。膾^{えつ}-膾^{とつ}-膾^{せい}ト。骨^{こつ}-膾^{とつ}同。○其腎^{せい}ヲ曰^い膾^{えつ}-膾^{とつ}-膾^{せい}ト。

(うにう。膾膾獸なり。骨膾に同じ。○其の腎を膾膾膾と曰ふ。)

第二に、「海獺」本文には、和名「うみをそ」をあげ、「あしか」に比定し、別名「海獺」「海獺」を示す。

うみをそ。今按、あしか。一名海獺。獺又作獺。

(うみをそ。今按ずるに、あしか。一名、海獺。獺、又、獺に作る。)

図像には、両者ともに青海波の上を泳ぐ姿が描かれ、「海狗」は斑の海狗一匹、「海獺」は白い海獺一匹が波の上を泳いでいる。「海狗」「海獺」の対応は、同じく海に生息する点にあるといえよう(図D)。

以上のことから、「海狗」「海獺」も、上下一対として対照的に配置されていることが考えられる。掲出語が対語になっているのみならず、図像もまた、対の形式とし上下で対応している。「海狗」「海獺」の図像は、上下一対の獣として、身体全体が同じ向きに描かれている。

(二) 部首一致

ここでは、紙幅の都合上、巻十五「虫介」の「蠖蝮-蚰蜒」「蜥蜴-蜈蚣」、巻十七「菜蔬」の「蕪菁-菜菔」の三例を取り上げて考察することとする。



図D・③ 「海狗」「海獺」
『訓蒙図彙』巻十二 16ウ

④ 「蠖蝮」「蚰蜒」(図E)

上下一対の二字掲出語「蠖蝮」「蚰蜒」は、ともに虫偏である。

第一に、「蠖蝮」の本文は次のとおりである。

俗云、はさみむし。^{きょうしゅう} 蝮-蝮、^{しゅうけう} 搜-夾並同。

「蠖蝮」の本文は、俗称「はさみむし」をあげ、「蝮蝮」「搜夾」と同じと注する。

第二に、「蚰蜒」の本文は次のとおりである。

俗云、げじげじ。^{いんあん} 蝻-蝻、^{れいけう} 蛉-蝻、^{じうじ} 入-耳、^{さうかいちう} 草鞋虫並同。

「蚰蜒」の本文は、俗称「げじげじ」をあげ、「蝻蝻」「蛉蝻」「入耳」「草鞋虫」と同じと注する。まず、「俗云～」とし、その後に「～並同」という記述の順序も共通する。

図像「蠖蝮」「蚰蜒」は、ともに左側に直線で地面を表し、その右に虫を描く。「蠖蝮」は三匹、「蚰蜒」は二匹である。また、「蠖蝮」は小さく、「蚰蜒」は大きく描かれている。図像で実際の大きさを表現している。

このように、「蠖蝮」「蚰蜒」は、上下一対として掲出語・本文・図像がそれぞれ対応している。また、図像全体は、ともに版面の左側に寄せられている。

⑤ 「蛄蜥」「𧈧蝮」(図F)

上下一対の二字掲出語「蛄蜥」「𧈧蝮」も、ともに虫偏を有する。

第一に、「蛄蜥」の本文は次のとおりである。

いらむし、一名^{ぼく} 𧈧。○^{せんちう} 髯虫、かはむし、一名^{うまうちう} 烏毛虫。○^{しちう} 戴虫、虫+^{ちう} 扈虫、^{まうと} 蓋毛蟲之通-称也。

「蛄蜥」の本文は、和名「いらむし」、別名「𧈧」をあげる。また、同類の「髯虫」を「かはむし」とし、別名「烏毛虫」を注する。また、「戴虫」「虫+扈虫」を「毛蟲」の通称とする。

第二に、「𧈧蝮」の本文は次のとおりである。



図E・④ 「蠖蝮」「蚰蜒」
『訓蒙図彙』卷十五 14 才



図F・⑤ 「蛄蜥」「𧈧蝮」
『訓蒙図彙』卷十五 17 才

おきむし。俗云、しゃくとり。尺しやくわく-蠖しやく也。螂そくしやく虫+就同。○似ア尺-蠖ニ而青ク、小ナル者ヲ為メ螟いれい蛉ト、あをむし。

(おきむし。俗云、しゃくとり。尺蠖なり。螂虫+就に同じ。尺蠖に似て青く、小なる者を螟蛉と為す。あをむし。)

「尺蠖」の本文は、和名「おきむし」、俗称「しゃくとり」、別名「尺蠖」をあげ、「螂虫+就」と同じと注する。また、「尺蠖」に似るが、青くて小さいものを「螟蛉」とし、さらに、和名「あをむし」をあげる。「蛄蜥」「尺蠖」の本文は、先に和名、別名等をあげ、その後に同類の虫をあげ、その和名、解説を加えるという記述に順序が共通する。

図像から見れば、「蛄蜥」「尺蠖」はともに植物の枝のうえにおり、構図も類似する。「蛄蜥」は、身体に刺毛があり、「尺蠖」はU字型になって動く姿を描く。

以上のことから、「蛄蜥」「尺蠖」は上下一対として掲出語・本文・図像がそれぞれ対応していることが確認されよう。

⑥「蕪菁」「菜菔」(図G)

上下一対の二字掲出語「蕪菁」「菜菔」は、ともに草冠を有している。

第一に、「蕪菁」の本文は次のとおりである。

あをな、今云、な。蔓菁まんせい同。ぶぶこんこん。すすううさいさい。たかな、今按、葉ハ高ク根ネ小ナル者也。

「蕪菁」の本文は、和名「あをな」をあげ、「今云」として「な」とする。また、「蔓菁」と同じと注する。また、同類の「蕪根」を「かぶら」とし、「菘菜」を「たかな」とし、葉が高く、根が小さいものであることを注する。

第二に、「菜菔」の本文は次のとおりである。

おほね、言ハ大オホ根ネ也。蘆らふく-菔ふく、蘿らふく-菔ふく、蘿らふく-蔔ふく、温うん-菘すう、土と-酥そ並ニ同。

「菜菔」の本文は、和名「おほね」、別名「大根」をあげる。また、「蘆菔」「蘿菔」「蘿蔔」「温菘」「土酥」と同じと注する。

図像「蕪菁」「菜菔」は、いずれも二個ずつ描かれている。「蕪菁」は根が丸く、細い。「菜菔」も根が丸く、細い。「蕪菁」「菜菔」の対応は、形状が類似する同種の菜蔬である点に見出すことができよう。



図G・⑥「蕪菁」「菜菔」
『訓蒙図彙』卷十七 7ウ

以上のことから、「蕪菁」「菘菹」は上下一対として掲出語・図像がそれぞれ対応しているともてよい。

寛文版本「凡例」に「属対」と述べるように、寛文版本の掲出語は対語で構成され、本文は対応しており、図像も上下一対の対照的な絵柄を配している。『訓蒙図彙』の版面においては、上下一対の二つの図像の対照が明らかに意識されているのである。

むすび

以上、『訓蒙図彙』の「属対」について、掲出語・本文・図像の三つの要素から検討を加えた。

『訓蒙図彙』寛文版本の掲出語は、対語の性格を有しており、一字の一致、部首の一致という対応関係が見られる。さらに、上下一対の二項目の対語の形式は、版面上下に配された掲出語のみならず、本文の構成と図像にも及んでいた。こうした編纂上の工夫によって、『訓蒙図彙』の版面は、上下一対の掲出語・本文・図像が、三位一体となって、それぞれに対応している。

『訓蒙図彙』寛文版本のもつ絵入り百科事典という性格は、掲出語・本文の対語的構成のみならず、図像にも反映され、絵画化されているのである。

注

- 1) 杉本勲『近世実学史の研究』（吉川弘文館、1962年3月）。
- 2) 杉本つとむ「解説」（『訓蒙図彙』早稲田大学出版部、1975年7月）。
- 3) 『訓蒙図彙』の引用は国立国会図書館〈117-18〉、寛文六年（1666）・山形屋版本に拠る。
- 4) ただし、巻五「身体」のうちの二六項目は、上下二段に二項目を配する版面ではない。本稿では、それ以外の項目を対象とする。
- 5) 拙稿「幼学書・手習い書と『訓蒙図彙』—寛文版本の四字句・上下一対の構成をめぐって—」（『水門一言葉と歴史—』第二九号、勉誠出版、2019年12月）。
- 6) 注5)に同じ。
- 7) 注5)に同じ。
- 8) 早川光三郎『新釈漢文大系 第五八巻 蒙求（上）』（明治書院、1973年8月）。
- 9) 相田満編『標題文芸（参）』（和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究、第三年度研究報告、2005年3月）。
- 10) 韓艶玲「類書と詩—『初学記』『事対』を中心に—」（『中国学志』随号（第十七号）、大阪市立大学中国学会、2002年）。